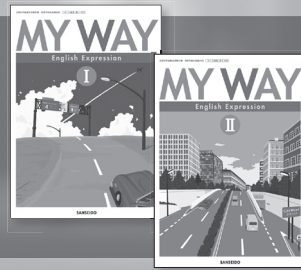


特集 「新教科書2」— これからの英語教育

『MY WAY English Expression I・II』 の編集方針 —英語のしくみを学び、 論理的な表現力を養う—



同志社女子大学 飯田 毅

1. はじめに

『My Way English Expression』は、『My Way English Expression I』（以下、『英語表現 I』）と『My Way English Expression II』（以下、『英語表現 II』）の2部構成になっています。その狙いは、生徒一人ひとりが言語能力と言語感覚を磨き、明確な論理展開の方法と表現力を培い、将来、諸外国の人々とコミュニケーションが取れ、ひいては親密な人間関係を築いていける態度を育成することにあります。

その目標を達成するために、著者である私たちは以下5つの編集方針で臨みました。第1に、生徒が英語のしくみ(文法)を体系的に学べるようにしました。次に、学習内容を絞り、生徒が無理なく基本的事項を学べるように配慮しました。3番目に、文型・文法事項を学ぶレッスンと「聞く・話す活動」「書く活動」であるProject Work等を分け、生徒が取り組みやすいようにしました。4番目に、文法シラバスレッスンに題材(トピック)を設定し、生徒の記憶に残りやすく、題材について表現しやすいようにしました。最後に、生徒がレッスンごとに英語で表現する活動も無理なくできるように配慮しました。

2. 『英語表現 I・II』の構成と特徴

『英語表現 I・II』の全体の構成について簡単に述べておきましょう。『英語表現 I』は5つのUnitに分かれていて、それぞれのUnitで、ある程度関連のある基本的な文法事項を学んでいきます。5つのUnitは次のような構成になっています。Unit 1は時制、Unit 2は助動詞と受動態、Unit 3は不定詞、動名詞、分詞、Unit 4は比較と関係詞、Unit 5は仮定法、否定、話法、接続詞です。『英語表現 II』では、3つのPartに分かれ、Part 1が『I』と同じような

つのUnitを持った、やや応用的な文法事項や英語の特徴的な構文を扱っています。Part 2ではパラグラフ・ライティングの基礎を、Part 3ではディスカッションとディベートの基礎を学びます。このように、本書は基礎的な文法項目から、最終的にはパラグラフ・ライティング、ディスカッションやディベートまで幅広く学べると言う点で、総合的な表現の教科書です。

次に、本教科書の特徴を7つにまとめて述べてみましょう。

(1) Useを毎回の目標とした文法シラバス

本教科書では英語のしくみである文法・文型を重視します。しかし、英語のしくみだけを理解するのではなく、それらを用いて最終的に生徒が教室で表現活動ができることに狙いがあります。そこで、『英語表現 I・II』の毎回のLessonでは、Learn, Practice, Useという段階を踏んで学んでいきます。Learnで学んだ文型・文法事項を、Practiceで意味のある練習をし、最終的に生徒の身近な場面で使うUseに到達できるようになっています。こうして、話したり書いたりした基礎の上に、総合的な言語活動であるProject Workを取り入れました。

『英語表現 I』では、中学校で学んできた基礎的な文法事項を復習しながら、新しい文法事項を学んでいきます。例えば、Unit 1では時制を扱いますが、この中の新出文法事項は、現在完了進行形と過去完了形です。『英語表現 II』では、『英語表現 I』で扱えなかったやや応用的な文法事項を扱います。その際に、『英語表現 I』で扱った文法事項の復習から始まることで、『英語表現 II』で学ぶ新出文型・文法が学びやすいように配慮しました。このように本書では、1つ1つの文法事項を丁寧に扱って、何より生徒が理解できるように配慮しています。

(2) 学びやすい文法配列と意味のある文法のまとめ

従来の文法教科書の問題は、機械的な練習問題を解くことだけに終止している点です。そこで、本教科書では、Unitという文法事項のまとめを作り、その中で体系的かつ意味を重視した指導ができるように工夫しました。例えば、Unit 1では、日本語と大きく異なる英語の時制を扱い、中学校で学んだ時制を含めて英語の基礎的・基本的な時制を学びます。Unit 2では、助動詞を話者の心的表現と捉えます。また、受動態の形式だけを指導するのではなく、受動態が使われる際に重要である「話し手の視点」という観点から取り扱います。つまり、これは1つの出来事を表現する際に、話し手が何に焦点を当てるかによって、能動態になったり、受動態になったりするという点です。また、それぞれのUnit終了後には、Unitで扱った文法を復習します。さらに、生徒の文法に関する意識を高めるために、英語のしくみとコミュニケーションを結びつけたGrammar for Communication というコラムを設けています。

『英語表現 II』では、基本的に『英語表現 I』で取り上げられなかった文法事項を扱います。具体的には、Unit 1で「時制、助動詞、受動態の発展」、Unit 2では、「不定詞、動名詞の発展」、Unit 3では、「比較表現、関係詞、仮定法、否定表現、話法の発展」、Unit 4では、「重要構文の学習」になっています。例えば、現在進行形の基本は『英語表現 I』で学びますが、「近い未来を表す」現在進行形は『英語表現 II』で学びます。

(3) 中学と高校の橋渡し

小学校の英語教育が始まり、中学との連携の重要性が言われていますが、中学と高校の連携も古くて新しい問題です。私自身、高校生になったときに、中学との英語の授業の違いに戸惑ったことがあります。その最も典型的な例は、基本的な文法用語を知らないことから起こる問題です。高校の先生が何気なく使っている文法用語がわからず、英語が急に難しくなったと感じる高校生が多いからです。文法用語の知識と英語力との間には何も関係がありません。文法用語は、本来、英語のしくみを説明する際に使うと便利な言葉です。その便利な言葉が生徒の理解の障害になる場合があります。そこで、『英語表現 I』では、教科書の本課の前にGet readyとい

う復習の課を設けて、英語の文法の基礎を身につけると同時に基本的な文法用語を理解できるようにになっています。その中には、例えば、高校生にとっては難しく感じる英語の冠詞の用法の基本が、名詞の単数・複数とともに解説されています。もう1つの中学と高校のギャップの問題として、扱う文法項目の間の関係がよくわからないということがあります。それに対して本教科書では、Unitの最初の扉は、その中で扱う文法事項の要点を生徒にわかりやすくなるように図にまとめ、Unit内で扱う文法項目間の関係もできる限り関連づけられるように示してあります。こうして生徒はUnit内で何を学ぶのかを理解し、目的を持って学べるようになります。

(4) 1つの課に含まれる様々な活動

それでは、見開き2ページになっているLessonについて、もう少し詳しく述べてみましょう。生徒は写真を見て正しい英文を選ぶlisteningの活動から入ります。次に、Learnでは目標となる文法項目を代表する2つの基本文と、同じ文法項目に関する別の例文が簡潔でわかりやすい解説とともに示されています。その次に、目標となる文法項目の理解度を確かめる簡単な練習問題、Checkがあります。ここまでが見開きの左側の部分です。時間配分としては、ここまでの1時間の予定です。右側のページは、練習問題であるPracticeと目標となる文法項目を使って生徒自身が文を書き、話す活動となるUseです。練習問題と言っても、機械的な練習ではなく、意味を考えた練習問題が含まれています。例えば、Grammar in Useでは、目標となる文法事項を使った50 words程度のまとまった文章があり、英語を聞いて、空所を補充するdictationの活動と全体を通して音読する活動が含まれています。また、生徒の理解を助けるために、右側にその文章に関する日本語のOutlineが示されています。Exerciseでは、目標文法事項に関する練習問題が易から難へと配列されています。そして、最後にUseがあり、ここで生徒は目標文法項目を使って、英語の1文を書き、それを基に発話することになります。

(5) テーマや英文から、文化や言語に対する気づきを促す

文法参考書にはあらゆる文型と詳しい説明が書か

れていますが、欠点として、生徒が表現したい一貫したテーマに基づいて書かれていません。本教科書では、それぞれの課ごとに、ゆるやかに統一されたテーマがあります。例えば、『英語表現Ⅰ』のLesson 8は「興福寺の阿修羅像」となっています。全体が阿修羅像の話ではなく、日本の伝統文化を扱いながら、Grammar in Useでは阿修羅像がテーマになっているのです。また、練習問題には「江戸時代には梅の花が好まれていた」、「アイヌ語はかつて北海道で多くの人々に話されていた」というような伝統文化や言語に対して、生徒の気づきを促すような例文も多く含まれています。

(6) 論理性を養う3行の英作文と Paragraph Writing

『英語表現Ⅰ』のUnitの最後には、全体をまとめた文法問題とともにWrite a Paragraph!という活動が設けられています。この活動の目的は、Useで行ってきた1行英作文を3行の最小のパラグラフにすることです。正式にはパラグラフとは言えないかもしれませんが、生徒は「導入」「展開」「結論」という指示に従って、文と文との論理関係を理解しながら、英語で文章を作っていくこととなります。この活動は『英語表現Ⅱ』で、本格的なパラグラフ・ライティングの基礎を学ぶ事につながります。『英語表現Ⅱ』で扱うパラグラフの基本は、「例示・列挙」「分類」「比較・対照」「原因・結果」「分析」です。Learnでパラグラフの基本を学び、Practiceを通して練習問題を解きながら、Write a Paragraph!で段階を踏んで最終的にパラグラフが書けるように工夫してあります。従来のライティングの教科書では、本教科書のような細かい学習段階を踏まないために、パラグラフを書く事を諦めてしまう場合が多かったようです。本教科書はそのことを避けるために、生徒が一人だけでも学習できるように配慮しました。このパラグラフの練習を通して、生徒は文と文との関係を考え、論理的表現方法の基礎を学んでいきます。

(7) 総合的な言語活動

(Project Work、Discussion、Debate)

『英語表現Ⅰ』では総合的な言語活動が全体で5つ用意されています。それぞれ活動展開が異なりますが、全体の流れとしては、英語を聞いたり読んだり

する活動から生徒の立場でまとめた英語を書き、話す活動へ段階を踏んで作られています。さらに、それぞれには話す際に注意すべき点として、Tips for Speaking というコーナーが設けられています。

『英語表現Ⅱ』では、Project WorkにDiscussionとDebateが加わっています。今まで、この種の活動は「オーラル・コミュニケーションⅡ」という科目に入っていたものです。先生方の中には、本当にこのような活動ができるかどうか不安に思っている方がいるのではないのでしょうか。そのような心配はいりません。いずれの活動もIntroductionで話題の確認をし、Preparationで自分の立場を決め、他人の意見を聞く練習をし、Your Turnの所で、実際に英語でディスカッションしたり、ディベートをする事になります。このように初めて英語でディスカッションやディベートを教える場合でも、生徒が自然に活動できるように配慮されています。ここで大切な事は、実際に英語でやってみるということです。片言の英語でいいのです。日本語が混ざってもいいのです。重要な事は、そのような体験を通して、どのように英語を話すのか、ということを生徒に考えさせる事です。英語でやり取りができないのは、心理的な問題なのか、表現力が十分についていなかったのか等の原因を考えさせ、最終的に、もう一度個々の文法項目の表現に戻る事にあります。このように実際にコミュニケーションをしてから、もう一度個々の表現方法に戻る事ができるのもこの教科書だからできるのです。

3. おわりに

以上が『英語表現Ⅰ・Ⅱ』の特徴です。最後に、「英語で行う授業」に関して簡単に述べておきましょう。本教科書を使って、英語で授業を行うことは可能です。しかしながら、英語で授業を行うことが到達目標ではなく、生徒のコミュニケーション能力を育成するための1つの手段と考えます。本教科書では、文法解説は、むしろ日本語で行うべきです。このことは学習指導要領の解説にも書かれています。最近のBilingual教育でも言われていることですが、英語で授業を行うことよりも、両方の言語を伸ばすために両言語をどのように意図的・計画的に使っていくかが課題です。ぜひ、本書を手にとってご覧ください。